ストーリーのあらすじ

青少年フットボールで活躍するクロントイスラム出身の少年、ムーハムの生い立ち

クロントイスラムで生まれ育ったムーハムは、5 歳の頃、スラム内の幼稚園(クロントイ幼稚園)で自分と同年代の子たちが集まってフットボールをしているのを見て、自分もフットボールをしたいと思い父親に話した。その頃無職だった父親は園に出入りするのはバツが悪く、近所に住む親戚にムーハムが練習に参加出来るよう託した。

コーチのケーオ氏は、地域の青少年を劣悪な家庭環境や麻薬トラブルから守りたいという気持ちから園庭でフットボールを教え始めもう 30 年以上になる。ケーオ氏曰く、ムーハムは言う事をよく聞くし、フットボールの才能もあった。何より彼の家庭環境が悪いことはよく理解していた。5 歳頃から 8 歳グループのチームに入れても対抗試合でムーハムの活躍ぶりはダントツだった。

その頃ムーハムの才能を見出した他学校からのスポーツ奨学制度の話があり、ドゥアン先生は進路を相談する為にムーハムの自宅を訪問したが誰も対応する者がいなかった。園にいる限り、他にも友達や先輩や誰かしら話す相手がいるが、この家庭にはムーハムの居場所はないと感じた。ムーハムは、朝からフットボールの練習をして夜 9 時、10 時まで園にいる事もあり、校舎の 2 階で寝泊まりもしていた時期もあった。ケーオ氏とドウアン先生が食事などの面倒も見ながら、幼い頃から約 10 年間そんな生活を続けていた。

父親は当時定職をもたず子供にも一切無関心。一度も息子のフットボールの練習や試合を見に来た事はなかった。ムーハムが他所で腕を怪我した時、ケーオ氏が 3 日後に病院へ連れて行くと骨折していたという事もあった。ムーハムが小学４年生の頃、見るに見かねたケーオ氏はムーハムの父親に会いに行った。ケーオ氏は、自分の子供が何をやってるかどうしてるか知りたいと思ったことはないのか？一度試合を見に来たらどうなんだ？と言うだけ言ってそのままバイクで走り去って行った。父親は不満に思ったものの、その後内緒で試合を見に行くことにした。

初めて試合を見に行った父親は、活躍する息子を見て一家の大黒柱である父親の自覚がその時一気に目覚めた、自分も変わりたいと思ったと言う。翌日には仕事を探しに行った。今では借金も返済し、子供が必要な服や靴を買ってあげるようになった。休みにはどこにでも家族で出かけ、試合の日は家族で応援へ行っている。

父親が変わるとムーハムも家族と向き合うようになった。練習の様子を父親に報告したり、今日は家族で外食するなどと話すようになった。以前はこんな事は一度もなかった。学校の勉強もするようになり成績も上がった。
母親曰く、以前家族はバラバラで誰が何をしようと関心もなかった。試合を見に行って、ムーハムがこんなに真剣に打ち込んでいたと知ってから家族一団となり子供をサポートしようと、毎回応援に行くようになった。

ムーハムは、もしここでの生活がなかったらスラムの悪い習慣に巻き込まれていたかもしれない、ここの存在と長年自分の世話をしてくれていたケーオ氏とドゥアン先生に感謝をしていると語っている。